2022年シンポジウム：『専門医取得をめざす若手医師達へ 病理×臨床win-winな関係を目指して,今更聞けない病理部門とのつきあい方を伝授する.』

# real world で病理医が臨床医に求めるもの：呼吸器

南　優子†

第76回国立病院総合医学会
2022年10月７日　於熊本

IRYO　Vol. 77　No. 6（414－418）2023

**要旨**　肺癌領域では病理組織や細胞診検体を用いたコンパニオン診断および遺伝子診断が活発に行われていて，近年病理医との連携が声高に叫ばれ始めた．そのため，多職種カンファレンスが行われているがいまだ要望は臨床医から病理医への一方通行の体制が多くみられる．また病理医は内科や外科のように専門が細分化されておらず，病理医数は少なく，かつ必ずしも呼吸器の病理診断が得意ではない場合もあり，内科医や外科医が望むレベルまで各科の要望に応えられないことがある．一方，研究や治験，論文執筆，学会発表の際に病理医の協力を必要とし依頼するのであれば，研究費の配分，論文や学会発表の際に共著者とすることが他科の医師に対しての礼儀である．

ゆえに内科医や外科医は病理医がストレスなく，そして誤解なく診断が行えるように必要十分な情報を依頼書に記載することが必要である．病理検体の取扱いに際してはとくに検体を迷子にしないことが重要で，検体を固定するためのホルマリン瓶には患者名やIDが記載されたラベルを瓶の側面に貼ること，検体処理は１症例ずつ行うことが大切である．

また患者治療に直結するコンパニオン診断，遺伝子診断のためには採取した検体を速やかに４℃冷蔵保存３時間までか，ただちに10％中性緩衝ホルマリンで固定をすることが必須である．正しく固定しDNAやRNAの質の担保を行わなくてはコンパニオン診断，遺伝子検査で必要な結果が得られない．

キーワード　病理医，病理検体取扱い，コンパニオン診断，質の担保

## はじめに

昨今，肺癌領域では患者治療方針決定のために，病理組織や細胞診検体を用いたコンパニオン診断，遺伝子診断が活発に行われていて，病理医との連携が声高に叫ばれ始めた．多職種カンファレンスが行われているとはいえ，病理医は患者と直接接する業務ではなく患者の状態は知らない上に，取っ付き難く，暗く，口喧（やかま）しく，顕微鏡ばかりみているイメージが先行している．臨床医とのコミュニケーション

国立病院機構茨城東病院胸部疾患・療育医療センター　病理診断科　†医師
著者連絡先：南優子
国立病院機構茨城東病院胸部疾患・療育医療センター　病理診断科
〒319–1113　茨城県那珂郡東海村照沼825
e-mail : minami.yuko.qs@alumni.tsukuba.ac.jp
（2023年３月２日受付　2023年８月４日受理）
What Pathologists Expect from Clinicians in the Real World: Respiratory
Yuko Minami
NHO Ibarakihigashi National Hospital, The Center of Chest Diseases and Severe Motor & Intellectual Disabilities, Department of Pathology
(Received Mar. 2, 2023, Accepted Aug. 4, 2023)
**Key words**：pathologist, pathological sample management, companion diagnosis, assurance of quality